
百怪 動物の怪 1 8話

annmin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百怪 動物の怪1~8話

【著者名】

ann-n

N4563M

【あらすじ】

犬・猫以外の、ペットや動物に関する怪。

「木の葉」

マッサージ店に勤めている女性から
聞いた話。

本格的な店ではなく、いわゆる10分、
15分いくらいのクイックマッサージといつ
ものである。

「何かを“背負って”いる人が来たり
すると、普通より疲れたりはしますね」

彼女の話によると、普通に疲れている場合は
いいのだが、中には知らず知らずのうちに、
“憑かれて”いる人が厄介だという。

彼女は元々心靈とかそういうものを信じる
性格ではなかったのだが、その人生觀を
変えるような出来事に遭遇したのは、ある
店に勤めている時だった。

「こつものよう、元気な人をマッサージ
していたんですけど

肩や首の凝りが酷い人で、いくらせしても
ほぐれたような気がしない。

汗だくなつていると、店長が様子を見に

来た。

「僕が代わりに」

さすがに店長だと思つていると、彼は手を持つてきたスプレーで濡らし始めた。

「何ですかそれ？」と聞いても答へず、「そのお客様の肩を揉み始めた。

濡れた手で揉んでいるんですから、

そのうちアカアカすりみたいになっちゃつて。汚いなあ、とか思つて見てたんですが

それはアカではなかつた。

こする度にそれはポロポロと肌から浮き出きたが、よく見ると小さな木の葉のように見えたといつ。

しかも、それは床には落ちずに、肌から出ては中空で渦巻きを作つていぐ。

「ちよつと窓を開けて」

店長に言われるがままに窓を開けると、それはつむじ風のように舞いながら、開けた窓の隙間から出て行つた。

「そこで気付いたんですけど」

それは木の葉ではなかつた。

正確には、葉を羽根のよつにした蝶の一群だった。

その客は、マッサージが終わるとすぐ喜んでいた。

曰く、どこのマッサージ店に行つてもダメだつたけど、ここはスゴい、あれだけ治らなかつた肩凝りが治つたとそつ何度も礼を言つていていたといふ。

「あいつ、どこかの山で火遊びしてきたな

その客が店を出て行つた後、店長がぽつりとそう言つたのが印象的だつたといつ。

それから半年ほどして、店長は実家を継ぐといつ理由で、故郷へ帰つてしまつた。

「神主の息子さんだつたみたいです」

彼女も、今は別の店で働いているので、彼やその店がどうなつたかは不明だが、今でもあのスプレーの中身だけは教えてもらえば良かつたと、残念そうに言つた。

「ジョギング

去年結婚したばかりの女性から聞いた話

彼女はあるスポーツジムで今の夫と知り合い、結婚したという。

いわば夫婦揃つて体育会系であり、夜のジョギングを日課としていた。

「だいたい、2キロくらいですかね。私も彼も、体動かしていないと調子が出なくて」

その日も、いつものコースを2人で走っていた。

マンションから大通りへ抜け、中間地点に小学校があつた。

「夜の学校つていうと、外から見てるだけでもあまり気持ちのいいものじゃないですけど、2人で走っていたので」

1人で走るより怖くはない。

いつものように、校舎から校庭側へ回るようにして通り過ぎようとした、その時

こちらを見ているような

校庭と道路を隔てる鉄柵の内側、その隙間から手を伸ばせば届きそうなほど

「見ちゃったんです」

白い、和服姿の、同性から見ても美人と思える女性が立っていた。

うつむいて、その長い前髪の向こうからこちらを見ているような

校庭と道路を隔てる鉄柵の内側、その隙間から手を伸ばせば届きそうなほど

位置に。

「あ、あなた、あれ」

走りながら顔をそちらへ向けて、夫に伝えようとするが、

「ああ、わかつていい」

と反応が返ってきた。

どうやら夫も気付いているようだ
それを聞くと、何やら安心感がわいて、
また遠ざかると共に冷静さを取り戻して
いった。

家に帰り、スポーツドリンクを飲んで
落ち着くと、あれは一体何なのだろう、
という話に当然なった。
しかし

「白鳥？ それともアヒルかな、
何て言つんですよ」

夫の説明では、そこに飼育小屋があり、
金網の中のそれが首を伸ばして、こちらを見ていたそうである。

妻がそれに気付いて、自分に声を掛けて
きたのだと思つていたらしい。

翌日、夫について恐る恐るそのコースを通して、なるほど確かに飼育小屋があり、白鳥が金網の中で寝ているのが見えた。

「ツルが化けるのならともかく、白鳥が化けるのなんてアリですか？」

そう言つて、彼女は首を傾げていた。

「後ひ髪」

ある大手に勤めているＳＥの話。

彼の仕事はいわゆる物流サーバーの管理で、都内の勤め先へは秋葉原を経由していた。

ある時、彼はいつものように秋葉原駅を降りると、妙なものを目にした。

「髪を後ろに縛っていた男性を見まして。今は珍しくないんでしょうか?」

しかし、妙だつたのはその髪の色だった。後ろに縛つた髪だけが茶色に染められていたのだ。

「他は普通に黒だつたんですけどね……まあこういうものもあるのかな?」
と思つて見ていたら

その後ろ髪がふわっと浮き上がった。
え？ と思って見続けていると、
肩に何かが乗っていた。

「小さな狐が乗っていました」

後ろ髪だと思っていたのは、その狐のしつぽ
だつたらしい。そしてその狐と目が合つた。
狐は一回あくびすると、目を閉じて眠つた
ように見えたといつ。

そして男性は狐を乗せたまま、雑踏の中へ
消えていった。

「何だつたんでしょうね、アレは」

答えようが無いものである。

「飛び降り」

釣りと山歩きが趣味で、夏と秋に必ず
奥多摩を訪れるという男性から聞いた
話。

ある年の秋、いつも馴染みにしている
民宿へ着いた彼は、自分の部屋で荷物を
整理し、外で一息つこうと廊下へ出た。
と、フスマを閉めた向こう、無人のはずの

自分の部屋から妙な音がする。

不思議に思つてフスマを開けると、中には5、6歳と思われる男の子が、自分の荷物をあさつっていた。

「 ハラツー！」

彼の声に驚いた子供は、少し開いていた窓から、一躍散に飛び出した。

「 あつ！？」

今度は彼が声を上げた。

彼の部屋は2階。いくら身軽な子供とはいえ無事とは思えない。

数秒して我に返った後、慌てて窓から下を確認するも、そこには誰もいない。

代わりに、彼がおやつにと買った

菓子パンを、袋ごと重そうに引きずつっていく狸の姿があつた。

「 誘拐」

知人から聞いた話。

本人ではなく、その彼女の事なのだが、

ペットはウサギ派で白黒のウサギを大変可愛がっていた。

しかし、やがて寿命を迎えた落ち込んでいる彼女を温泉に誘った彼は、その帰る日にとんでもない物を見つけた。

「持つてきちゃつた……」

彼女のバッグの中には小さなウサギがいた。温泉施設の一角にウサギ小屋というか、放牧場のようなものがあり、それが彼女をその温泉へ誘った理由でもあるのだが

「一匹くらになら……つて」

さすがに彼も問題とは思つたが、考えてみればそここのウサギは何十匹もいたそうで、一匹だけならわからないだろうと思い、目をつむつた。

事件は夜に起きた。

もつとも、気付いたのは朝。

「きやつ」という彼女の悲鳴と共に彼が見たものは、彼女のバッグだった。

ブランドもののそれが、無残にもボロボロになっていた。

長年ウサギを飼ってきた彼女は、その状態を一目で理解した。

しかし連れ帰ってきたウサギはゲージの中。

それに、

「……一匹じゃないよね、コレ」

と彼女は肩を落とした。

「仲間が怒ったんですかね。
で、返しに行きました?」

彼は首を左右に振り、

「俺もそう言つたんだけど、
ブランドバッグ一個ムダにしたんだから、
この「もらつてもいいでしょ!」って。
俺に言われても……」「…

そつ言つて彼は頭をかいた。

「鶏肉」

40代のサラリーマンから聞いた話。

彼がいつも通り通勤のため道を歩いて
いると、カラスが小さな野鳥を襲つて
いる場面に出くわした。

「「ラッ！」

思わず声を上げて、カバンを振り回して
その場へ乱入し、2匹とも別々の方向へ
逃げた。

野鳥を助ける事が出来たものの、考えて
みればカラスは食事をしようとしていた
だけなのに……と、気の毒な事をしたと
思い直した。

「それで、弁当を開けて、ちょうど鶏肉と
ミートボールが入っていたので、それを」

その場に置いて立ち去ったという。

少し離れてから振り返ると、先ほどと同じか
どうかはわからないがカラスが1匹、それを
ついばんでいるのが見えた。

仕事が終わってその日の帰り。

そういうえばここで今朝……と思いつながら
歩いていると、“オイ”と声をかけられた。

見上げると、塀の上に腰かけるように、
6、7才くらいの少年が座っていた。

「今日は許してやる」

そう言つと、スーパーのレジ袋を投げて
よこしてきた。

足元に落ちたそれは、何かがギッシリと

詰まつてゐるようだつた。

何だこれは？と思つて壇の上に視線を戻すと、そこには1匹のカラスがいて、そのまま羽ばたいて闇夜へと消えた。

「その子、普通の洋服を着ていたんですね」

レジ袋の中には、クルミが20個ほど入つてゐた。
少し肌寒くなつてきた、秋口の頃だつたといつ。

「お披露目」

私の通りお寺に來た、大学生から聞いた話。

冬のある時、彼は一羽のハトを拾つた。
道端にうずくまつてあり、どこかケガでもしたのでは、と病院へ運んだ。

「別にどこも何ともあつません。
ただ、いきなり寒くなつたので
びっくりしたのでしよう」

診てくれた獣医さんはそう言つたといつ。

当日は急激に寒くなつた日で、その年一番の
冷え込みだつた。

しかし、そんな理由で動けなくなつていの
かと、半ば呆れながらハトを自宅へ連れ帰る
事にした。

「まあ1週間もすると元気になつたし、
それで放してやつたんですが」

それからじしばらく後、彼が自室で寝ていて
ベランダから男女の声が聞こえてきた。

“ここだよ” “でもどうして？”
“一応僕がお世話になつた人だし”
“変な人ねえ”等と話している。

「でも、僕の部屋というか住んでいた場所は
マンション、それも10階で」

ただ、会話の内容からすると、口ひり口害を
加えるような悪意は感じない。

彼は恐る恐るカーテンを開けると、そこには
つがいと思われる2羽のハトがいた。

「2匹で僕の顔を見ていたんですが、すぐに
同時に飛んでいつてしましました」

ちなみに、彼自身には恋人はおらず、あれは
お披露目だったのか嫌味だったのか、未だに
判断に迷うそつである。

「窓」

今年社会人になつたばかりの男性から
聞いた話。

彼は初めての出張で、ある地方都市の
ビジネスホテルに泊まつた。

本当は日帰りだつたはずなのだが、仕事が
長引いてしまい、翌朝に帰る事となつた。

「翌日は土曜日でしたし、特に早起きする
必要もなかつたんですが」

それでも、窓から差し込む朝日と、その
サッシにとまつて鳴く何匹かのスズメの
声に起こされ、彼はホテルのフロントに
向かつた。

まだ9時にもなつていなかつたという。

「あんな階まで、スズメって来るんですね。
窓のところにいっぱことまつてましたよ」

そう話すと、フロントの係りが妙な顔を
した。

“窓って、客室の窓の事でしきうか？”
質問の意味がわからず、“ええ、まあ”と
生返事をすると、チェックアウトした。

ホテルから出た後、何気なく彼は自分
泊まつていた部屋の辺りを見上げた。

「え？ つい声に出てしましました」

「そこの窓、というよりホテルの上半分が、何かの改装か塗装でもしているのか、足場が組まれて、防護シートでおおわれていた。ホテルに入ったのは夜半だったし、いちいち全体を確認などせず、全く気付かなかつたといつ。

「でも、僕が見たのは本当に普通の、透明な窓とスズメたちだつたんですけどね……」

「幽霊よりはマシですけど、と彼は頭をかいだ。

「やべっ」

鳥好きな知人の話。

彼の家では、子供の頃からインコを飼い、鳥がいなかつた事がなかつたという。

「よくしゃべる」としゃべらない口に分かれますね。

先天的なものですよ」

覚える言葉は、主に口真似から。

何度も繰り返し、せらりと短い単語から覚えていくらしい。

何年か前、全く言葉をしゃべらない「ゴ」がいたそうだ。

しかし、一度だけその「ゴ」が言葉を発するのを聞いた事がある、と彼は言った。

「脱走の名人でね。

夜、何か飲み物でも飲もうと冷蔵庫に向かつたんだけど」

そこにその「ゴ」がいた。

テーブルの上で、何かモゾモゾとしている。また何かイタズラでも……と思って近付くと向こうも気付いたのか、振り向き

「やべっ」

と一言だけ発した。

後にも先にも、その「ゴ」が言葉を発したのはそれきりだった。

「あいつ、絶対意味分かってて言つてたよ

そう彼は確信しているといつ。

「モーゴ」

品川区に住んでいる主婦の方から聞いた話。

彼女は生まれも育ちも品川で、一時東京から離れていたが、結婚を機に実家の近くまで戻つてきていった。

子供も生まれ、その子が幼稚園くらいの頃に、こんな出来事があつたといつ。

「近くに小さな公園があつたんですけど、そこから帰つてきた子供が変な事を言い出したんですね」

「聞くと、 “モーモがいる” といつ。

“モーモ”とは牛の事だと思ったそうだが、公園に牛がいるなんて普通は思わない。確認のために外に出ると、子供は道案内をするように駆け出した。

「そのまま公園のトイレに向かつたので、中をのぞいてみたんですが」

そこには、狭そうに巨体を入れている牛がいた。

動物園でかぐよくないも確かにあつた。びっくりして子供を抱き上げると、そのまま家に戻つて夫にそれを告げた。

「でも、夫と一緒に行つた時にはもう牛の

姿は黒いのも無くて

今年中学生になる息子さんもその事は覚えていて、今でも時々話題にするところ。ホルスタインのよつな白地に黒模様の牛ではなく、全体的に茶色がかっていたそうだ。

「あげる」

5才になる女の子を持つ主婦の方から聞いた話。

ある時、家の内でその子が何かを持つている事に気付いた。よく見るとそれは二ンジンで、しかも先端がいびつな形で無くなっている。

「二ンジンなんか持つて、どうしたの？」

聞くと、その子は“お馬さんをあげた”といつた。

「お馬さん? どうにいたの?」

見ると、台所の窓が開いていた。しかしその子が手を伸ばしても届く高ではない。

そらに詳しく述べてみると、娘が台所を

見上げていたら、馬が窓からのぞいている事に気付いたという。

それで何かあげるものはないかと冷蔵庫を開け、ニンジンを持ち出した。

そのニンジンを頭上にかかげるようにして高く持つと、馬が窓から首を入れて食べた、という事らしい。

「でもねえ、家ってアパートで、それも住んでいる階は3階だったんですけど」

結局、そのニンジンは氣味が悪くて捨ててしまった。

その後、娘にはどう注意したものか悩んだが、

「もし何か窓から入つてきても、物をあげちゃダメ」

に落ち着いたらしい。

「コーヒー」

都内の、ある研究機関に勤める男性から聞いた話。

「水質調査を頼まれた時がありまして。
5、6年ほど前だつたかなあ」

いわゆる環境調査で、公的な依頼を受ける
事がよくあるのだという。

ある地域一帯の調査に向かい、サンプルと
していくつかの水源から水を採取した。

「その中で、小さな池があつたんですけど」

試験管に水を移していると、大きな影が
目の前を横切つた。

何だろうと思い、持つていた網でそれを
すぐおうと水中に突つ込んだ。

「それが、簡単にすくえてしまいまして」

大きな鯉が、網の中で身を震わせていた。
別に生物などのサンプルは必要ではなかつた
が、なぜか無性に持ち帰りたくなつて、道具
一式が車に揃つていたのもあり、車に入れて
持ち帰つた。

施設に帰り、大きめの水槽に入れて一息
つくと、彼はコーヒーを買いに自販機のある
コーナーへと向かつた。

「よくある紙コップ式のものだつたんですね……」

飲もうと口を近づけた時、不意にその表面が揺れた気がした。

え？ と思って口を離すと、コーヒーの中からヒゲのある魚の頭がぬつと現れた。

「そりや驚きましたよ」

思わず叫んで紙コップを落とすと、中身が床に飛び散り、香ばしい匂いと色が、辺り一面を染め上げた。

もちろん魚の姿などビックリもなく、彼は手持ちのティッシュで床を掃除した。

部屋に戻ると、同僚が声をかけてきた。

「何で水槽なんか用意したんだ？」

そこには、水も何も無い空の水槽が残されていた。

ただ、中身は水を抜いたように濡れており、魚類特有の生臭い匂いも部屋に漂っていたといふ。

「多分あの池に戻ったんでしょうけど。
まあ確認出来る事ではないので」

彼は手に持っていた缶コーヒーをぐるぐると回しながら、不思議そうにつぶやいた。

「飛び魚」

アクアショップに勤める男性から聞いた話。

水の中に住む生物というのは、水質・温度・エサ等、管理が大変難しく、しかも24時間体制で注意しなければならない。

また、病気に関する治療方法が確定していない事がほとんどで、非常に神経を使うといふ。

「それでも、たった一つ、楽な事があるんですよ」

『脱走』だという。

犬や猫と違い、水槽から出る=死なので、少なくともその心配は無い。

「基本、人の手による移動しか出来ないですからね。」

ただ、その分盗むのも簡単になるので、「長一短かな」

だから、一番重要なのはセキュリティーだという。

ちょうどアロワナを「こ」そり盗む窃盗犯が出たとかで、警備を強化していた時の事。1日1回、閉店した店内を見回っていたのだが、床が濡れている事に気付いた。

「水槽は網かガラスで閉じているんですが、ガラスの場合は隙間が開いている事があつて。

注意はしているんですが、よくこんな隙間から……というのは結構ありました

発見が早ければ助かる事もある。

懐中電灯で照らしながら、その一帯を中心探し回つた。

と、パタパタと羽音みたいな音がする。鳥？ と思ってその方向を照らすと

「タナゴ？ かフナ？ か……

それにズズメの羽をくつつけたようなヤツが飛んでいました」

中空で飛行を維持したそれは、口をパクパクさせながら、しばらく彼と対峙していた。しかし、それも4、5秒の間で、広くはない店内を飛び回り始めた。

「捕まえる、といつより、とつとと出でいつてくれと思って。

店内の明かりを付けて、窓を全開にしたんです」

その意図を察してか、開けた窓からその魚？ は飛んでいった。

月明かりか地上の外灯か、ウロコが光を

キラキラと反射させて、それは視界から暗闇へと姿を消した。

「翌日、魚の数を調べたりしたんですが、特に異常も無くて」

店長に一応話はしたが、“ウチの魚じゃなけりや、別にいい”と、取り合ってくれなかつたそうだ。

「カギ」

知人のライターから聞いた話。

ライターと言つても“元”で、今は主婦業に専念している。

そんな彼女は結婚する前、インコを飼っていた。

青っぽい、よくしゃべる賢い子（本人談）だったという。

「もう10年以上前になるけど」

その頃、まだ駆け出しだった彼女は、その日ある大手と打ち合わせの予定があつた。家を出る時間になつたので、玄関に向かうといつも置いてある場所に自宅のカギが無い。オートロックのマンションとはいえ、カギを

掛けないで出かけるなんて事は出来ない。

「慌てて探したんだけど、どうしても見つからなくて」

そういふ間にも、約束の時間は迫つてくる。

仕方なく彼女は、近所に住む友人に事情を話して、留守番してもらつ事にした。

「でも、結局その友人が来るまでは自宅で待つてなきやいけないじゃなし。

15分くらいで来てくれたけど、もう遅刻は確定だつたわ」

それでも彼女は自宅を友人に任せると、早足でタクシーを拾つた。

本来なら電車だが、そんな余裕はもつどこにもない。

10分ほどの遅刻で、待ち合わせ先に到着した。先方はすでに着いており、向こうも怒つているだろうと思つてこる

「会つた瞬間、『電車で来ましたか！？』

“無事でしたか！？”って言われて

それは、あの有名な毒ガステロが行われた日だった。

遅刻の言い訳どこの話ではない。

若い女性という事もあり、先方はかなり心配してくれて、打ち合わせの後は帰りのタクシー代までくれたという。

「家に帰つても、まだ現実感が無くて。友人にお礼を言って、とにかく自宅のカギを探す事にしたんですけど」

ふと、鳥カゴの中にいるインコが何かで遊んでいる事に気付いた。
それには、見覚えのあるストラップが付いていた。

「一人暮らしだったので、誰かがカゴの中に入れない限り、そんな事は無理なんですけどね」

その後、3年ほどでそのインコは死んだ。
6才で、かなり長生きした方らしい。

今でも命日の日には好物のイチゴを、埋めた場所に供えに行くという。

「マーク」

今は飲食店に勤めている女性の話。

彼女は大学進学で一人暮らし始めた際、ウサギを飼う事に決めた。

ペットを飼つのは初めての経験であつたが、初心者よろしく徹底した“守り”で飼育。オスのミニーウサギ（あまり大型にならない種の総称。正式な名称ではないらしい）の子供を1匹購入したのだが、3ヶ月もするとやんちゃな暴れん坊に育つた。

そんな彼女にも同じ大学の恋人が出来、自室で寝泊りするようになつた。冬になると彼はロングコートを着てきたが、ウサギは決まってそのコートを噉むようになった。

「嫉妬していたんですかね」

しかしそのウサギも、2年ほどで病氣になり、あつという間に死んでしまつたといふ。

診察、即座に入院、それから3日後といつ早いペースで、あまりの速さに悲しみを通り越して、数日は呆然としていた。

そんな時、彼から電話が掛かってきた。あのウサギは元気にしているか？　と実は彼の方はここ一ヶ月論文で忙しく、事情がわかつっていたので、彼女も連絡をなるべく付けないでいた。

どうしてそんな事を、と聞くと、大学で調べ物をしつつ寝泊りしていたのだが、

夜中に田を覚ますと壁にかけてあつた自分のコートが揺れている。

よく見ると下から引っ張られているようで、田を凝らすと何か小さなものが暗闇の中で動いていた。

電気を付けてよく見ようとスイッチを入れると、そこには何もなく、ただコートの裾が濡れていて、小動物特有の匂いが辺りにただよつていていたという。

「あの口はあの口なりに、知らせようとしていたのかな、って」

それから間もなく2人は同棲を始めたが、冬になると朝起きた時に彼のコートの裾が濡れている、という事が何度かあったそうである。

「ヌシ」

聞いた話。

お寺に来た、30代の男性とその両親の話。雑談を進める内、こんな事を言い出した。

「やういえば、家にはヌシがいたなあ」

何の事がと聞くと、幼い頃、よく雨が降った時などに、両親が彼に『ヌシが来たよ』と庭を見せた。

庭には、大きなガマ蛙が一匹、こちらをにらむように構えていた。

微笑ましい話だと思つて聞いていると、

「何だそれ？」

「私はそんな事知らないけど」

両親の方は覚えていないらしい。

彼は、いやよく両親が見せてくれた、と言つてきかない。

「ああ、思い出したわ。

そういえば、ホントにヌシだと信じていたわねえ」

母親が笑い飛ばすと、他もつられて笑つた。それでお開きとなり、一家を送り出す時、最後に残つた母親がポツリと言つた。

「あの子が小さい頃つて、2人とも共働きでアパート住まいだつたはずなんですけど……」

「庭つて、いつたいどこの事を言つているんでしょうね？」

「庭がどこというよりも、共働き

彼にヌシを見せたその両親が本当の両親だったのかという方が気になるが、それは口には出せなかつた。

「足」

ある僧から聞いた話。

「修行する場所は山の中ですけど、基本は身一つです。
中には車で上り下りする不心得者もおりますがね」

30代になつたばかりの彼は、前の修行であつた事を話してくれた。
僧と言つても、いつも修行に明け暮れているわけではない。
ある程度決められた修行時期や口数があり、それに沿つて動く。

「場所も決められています。
その宗派の総本山とか……
だから下手をすると一度に何十人、
何百人と集まる事になつて、同窓会
みたいな雰囲気になりますよ」

とはいへ、みな修行中の身である。
軽々しく話す事など出来るわけも無く、

宿泊所に戻り、やつと寝る前のわずかな時間が“自由時間”となる。

そこで今日の出来事や、修行の辛さ、今後の予定などを語り合つた。

「こんな事、仏に仕える身で言ひやいけないのかも知れないけど……」

隣りに寝ていた、ちょうど同じ歳くらいの修行僧が、そう言つてくわうに話し始めた。

「山の中で他の僧とすれ違つた時に……足がおかしなやつらがいたんだよ」

「足？」

山は広大だが、修行僧が集まっているので、歩いていれば1日のうちに何人もすれ違う。軽く会釈して別れるのが礼儀だが、ふと振り返つてよく見ると、着物の裾から出た足が、人間のそれでは無い僧がいた。

「あれはなんなんだ……」

動物の足には違い無いんだが……

それとも、修行が足りないからあんな物を見てしまうのか

すると、どこかで聞いていたのか、老齢の僧が話に割つて入つてきた。

「失礼な事を言うもんぢやない。

畜生でも修行しにくるのであれば

仏道者じや。仲間じや」

それもそつかと、納得してその口は寝た。
翌日の朝食時もその事が話題に上がったが、
その話を聞きつけた高僧がやってきた。
みな、お叱りを受けるかもと緊張している
と……

「古い文献にはそついう事もあったと
書かれていたのだが。
そうか、今でも修行に来ていらっしゃるの
だなあ」

そつ言つて去つていつたといつ。

「家族」

「田舎の祖父が話してくれたものだが」

故郷が中国地方の方から聞いた話。

祖父が子供の頃は、まだ山の中で生活を
営んでいる者がいた。

林業と狩猟を半々でやつてゐるような
サイクルだつといつ。

彼には妻子がいたが、ある時病気で2人とも死なれてしまい、山奥に一人で住んでいた。

春と夏には魚や山菜を、秋と冬にはキノコや獣肉などをふもとを持ってきて、米やお金に換えて日々を過ごしていた。

「だから、そういう事情もあってかいつも暗い顔をしていたそうだ。
ところが、いつ頃からかすごく明るく笑うようになつていつたんだと。
どうしてか、祖父の親父がたずねた
そうなんだが」

彼は答えた。

山の中でいつものように狩りをしていたが、一匹の狐がケガをしているのを見つけた。周りを伺うと、その子と思われる子狐が一匹、距離を取つて心配そうにしていた。

「何かの縁だろうと思つて手当にしてやつたらしい。

そうしたら、翌日から彼の家に2匹で現れるようになつたって」

身寄りのいない彼に取つて、その狐母子は家族同然になつたという。
だから、今は寂しくないんだと笑うよくなつたそうだ。

「そんな様子だからさ。

次第に、そいつと顔合わせる時は、

『狐は元気か?』って聞くのが

あいさつみたいになつたと

しかし、そんな彼が幾度目かの冬に、一度もふもとに来ない事があつた。

祖父の父も含め、心配した人たちが快晴の日に山の中へ捜索に向かつた。

半日ほどで男の家は見つかり、中から男の遺体が出てきた。

死因は病死。

流行り風邪をこじらせたのだろう、というのが医者の見解であつた。

「ただ、家中を見るとわからない事が
あつて」

綺麗に洗濯、整理された衣類があり、その中でも女性と子供の物と思われる衣服は、1人暮らしだつたはずの彼の家の中では目を引いた。

それだけでなく、食器や布団も3人分、長年使われた形跡があり、みんな不思議がつた。

「死に顔は非常に穏やかだつたと……

そう父が話してくれた事が印象に残つて

「 こ、 そ、 う、 言、 つ、 て、 た、 っ、 け、 な、 あ 」

シワの張った顔に、さらに深くシワを刻む
ように、彼は目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4563m/>

百怪 動物の怪 18話

2010年10月22日00時00分発行